

令和6年度（2024年度） 第2回東海市不登校対策協議会 会議録

- 1 日 時 令和6年（2024年）10月9日（水）
午後2時から午後3時
- 2 場 所 市役所302会議室
- 3 出席者 社会福祉協議会事務局次長兼地域福祉課長 宝達 真志
知多福祉相談センター主任 蜷川 允
東海市立緑陽小学校長 廣田 雅明
東海市立加木屋中学校長 富田 高生
東海市立平洲中学校主任養護教諭 早川 悦子
東海市立上野中学校生徒指導主事 木原 啓裕
こども課主任 木村 智明
健康推進課主任指導保健師 大串 文子
- 4 傍聴者 なし
- 5 事務局参加者
東海市教育委員会 教育長 鈴木 俊二
学校教育課長 桜井 正志
学校教育課 主任指導主事 明壁 啓純
〃 指導主事 池田森太郎
〃 指導主事 高橋 民子
〃 教育相談員 坂口 栄子
教育支援センター「ほっと東海」
教育相談員 武田 基二
教育相談員 深谷 公子
教育相談員 田島 一朗
スクールソーシャルワーカー 飯田 彩花
スクールソーシャルワーカー 西 実莉
スクールソーシャルワーカー 甲斐茉莉奈美

6 会 議

- (1) 教育長あいさつ
- (2) 会長あいさつ
- (3) 協 議

ア 子どもの自立と未来を語る会及び青空教室について

（指導主事より資料に基づいて報告）

「子どもの自立と未来を語る会」の結果

○不登校傾向の児童生徒とその保護者、関わる教職員等を対象に、東海市小中

学校校長会研究部の進路指導部が、8月3日（土）に東海市勤労センターで開催した。中学卒業後の進路先だけでなく、自立のための道筋について具体的に見つめたり考えたりすることを趣旨としている。

- 参加者は75名で、東海市の生徒・保護者・教職員等であった。昨年度に引き不登校傾向の生徒が多く通う学校の情報が1冊にまとまった資料を配付した。
- 「ほっと東海」に通級した高校生や専門学生、子供が不登校を経験した保護者、東海市スクールカウンセラー、東海市社会福祉協議会職員をパネラーとしたパネルディスカッションを行った。その後、進路指導主事からQ&Aを交えて不登校傾向の生徒の進路状況等について説明した。また、会場に学校ごとのブースを設け、保護者や生徒がパネラーや各校の進路指導主事と懇談することができた。
- 不安や悩みを抱えている参加者にとって、同じような経験をもつ方の話を聞いて、思いを共有したり励みになったりする機会を作るためにも本年度のようにパネルディスカッションの時間を十分に確保することや入試制度や中学卒業後の進学先の学校に関してより分かりやすく情報提供することができるよう、来年度へつなげていく。

「青空教室」の結果

- 不登校傾向にある児童生徒が、若狭湾の雄大な自然と触れ合うことで活動のエネルギーを充電し、参加者相互の交流を図り、新しい一歩を踏み出すことを目的に、国立若狭湾青少年自然の家で、2泊3日の日程で行った。
- 16名の申込みがあり、参加は小学生3名、中学生12名の計15名であった。ボランティアは東海市で募集した星城大学4名と日本福祉大学5名が参加した。事前に行った交流会を通して親しくなった参加児童生徒の様子を踏まえ、お兄さんお姉さんのような立場で3日間一人一人に寄り添ってサポートし、「チャレンジしよう」とする気持ちを後押しした。
- 3日間、天候に恵まれ、予定していた活動を全て実施することができた。事前に若狭湾青少年自然の家と綿密な打ち合わせを重ね、3日間を安全に活動できるように努めた。活動を通して、それぞれの児童生徒が自信をつけるとともに、エネルギーを蓄えることができた。
- 来年度以降は、国立若狭湾青少年自然の家のスタッフのサポートが減少するため、児童生徒の安全を第一に考慮し、海の活動の種類や場所を精選していく必要がある。
- 大学生ボランティアを確保していくために、星城大学、日本福祉大学、大同大学以外の大学にも募集を行っていく必要がある。

イ 不登校傾向児童生徒の状況について（非公開）

ウ ＳＳＷの活動の状況について（非公開）

エ ＳＣの活動の状況について（非公開）

オ 教育支援センター教室「ほっと東海」の状況について

（教育相談員より資料と事例に基づいて報告）

○今年度より東海市教育支援センター「ほっと東海」と名称を改め、3つ目の「ほっと東海」平洲中学校教室が設置された。

○本年度9月2日までに入級手続きをした児童生徒は、横須賀教室で29名、上野公民館教室で13名、平洲中学校教室6名、計48名である。

○学習は個別指導を基本とし、相談員、サポーターが児童生徒と会話をしたり、レクリエーションをしたりして、安心・信頼の関係づくりを心掛けている。

○一日を通して在室する児童生徒は少なく、午前か午後の1～2時間の学習をして帰宅する児童生徒が多い。そのなかで、保護者や本人と相談したり、昼食後の交流を楽しみにしたりして、滞在時間が伸びたり通級回数が増えたりする児童生徒も少しずつ増えてきた。また、個別のニーズに応じた支援を受けることで落ち着いて学習できる児童生徒もいる。

○異年齢集団での交流の場を通して、コミュニケーション能力を養おうとしている。

○不安感を抱えている児童生徒が多いので、様子を見ながら個別に相談活動を取り入れ、不安に対する対処方法について一緒に考えるようにしている。

○学校との連携を密にし、児童生徒の状況に応じて行事や得意な授業への参加を促し、登校支援を行っている。

○「ほっと東海」に入級したことや通級していることを大切にして、「ほっと東海」と学校と家庭を連携させていくことが願いである。

○「ほっと東海」では、異学校、異学年の児童生徒同士でコミュニケーションがとれる良さがある。

オ 主な意見

○不登校の要因で、家庭な問題や不適切な養育などが顕在化していると考える。

○幼少期での、様々な経験が不足している子どもが多い。

○学校の中だけでは解決できない問題をスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの力を借りながら解決に向けて取り組むことができている。

○3名のスクールソーシャルワーカーが児童生徒や家庭の支援にしっかりと取り組んでくれている。スクールソーシャルワーカーが関わった子どもや家庭

を福祉機関へ確実に引き継いでいく仕組みづくりが必要となる。

- 児童生徒への支援なのか、家庭への支援なのかを早めに見極めて、家族支援に繋げていくことが大切である。
- 現在、保護者になられている方々が児童生徒の頃に、不登校の問題が今ほど大きく取り上げられていなかったり、不登校の受け皿があるという経験をしていなかったりするため、不登校への適切な対応や不登校の支援の仕組みを知らない保護者が多いのではないかと考える。
- 「子どもの自立と未来を語る会」や「青空教室」は、不登校の児童生徒やその保護者にとって大変よい取り組みだと感じている。
- 「ほっと東海」平洲中学校教室ができたことで救われている生徒がおり、大変感謝している。
- 上野中学校校では、4月から校内で別室の支援がスタートした。1年生から不登校であった生徒が3年生になってから週2日から3日、別室に登校できるようになった。また、1学期に別室を利用していた1年生の生徒が2学期から教室に戻ることができた。
- 別室では、自主学習に取り組むことになっているため、長時間の自主学習に取り組むことが難しい生徒は、再度不登校になってしまう場合もある。「ほっと東海」の様々な活動を参考に、生徒にとってよりよい居場所づくりを考えていきたい。
- 不登校の保護者の中には、学校に行かせたいあまりに暴力を振るってしまったり、学校に必要な用具を準備せず、「学校に行かなくてもいい」という考えをもっていたりなど、2極化が見られる。